

姫路城城下町跡

—姫路城跡第424次発掘調査報告書—

2020

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代初期に池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をもつ城郭が整備され、その後400年間歴史を刻み続けています。

大天守が聳える姫山の麓に広がる城下町は、三重の堀によって、藩の中核が置かれた内曲輪、武家屋敷が建ち並んだ中曲輪、町人地・寺社地・武家屋敷地などで構成される外曲輪に区画されています。現在、内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として保護・顕彰が図られ、外曲輪では姫路市の中心として中核市に相応しい街づくりがおこなわれています。

今回報告する姫路城跡第424次調査は外曲輪南西部の忍町67で実施し、外堀石垣等が良好な保存で確認されました。

ここにその成果を報告し、姫路城城下町跡の調査研究の進展に資する所存であります。

最後に、事業実施にあたり、多大なご協力を賜りました株式会社 ANGELO、その他関係各位に心から御礼申し上げます。

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

例言・凡例

1. 本書は兵庫県姫路市忍町 67 で実施した姫路城跡第 424 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は株式会社 ANGELO による建物建設に先立って実施した。
3. 発掘調査及び出土品整理作業等は株式会社 ANGELO と姫路市の間で委託契約を締結して実施し、その経費は株式会社 ANGELO が負担した。
4. 発掘調査は 456 m²を対象とし、令和元年（2019 年）7 月 25 日から 10 月 16 日の期間で実施した。
5. 発掘調査報告書の編集は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。
6. 発掘調査開始から報告書刊行までの体制は以下の通りである。

姫路市教育委員会

教育長 松田 克彦

教育次長 坂田 基秀

生涯学習部

部長 沖塩 宏明

文化財課

課長 花轔 和宏

課長補佐 大谷 錦彦

技術主任 関 桂

埋蔵文化財センター

館長 前田 光則

課長補佐 岡崎 政俊

係長 森 恒裕

技師 黒田 祐介〔現地調査・整理担当〕

7. 調査区平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
8. 土層注記の色調は『新版標準土色帳』(1999 年度版)に準拠している。
9. 出土遺物、図面、写真等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
10. 本書の作成に際しては、調査地内で以前に実施した姫路城跡第 366 次調査の成果を検証し、今回の調査成果を踏まえてその評価等に修正を加えた部分がある。
11. 発掘調査及び出土品整理作業、発掘調査報告書の作成にあたっては、以下の機関のご支援、ご協力を賜った。

株式会社 ANGELO 姫路市立城郭研究室

目 次

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯と経過	1
第 2 節 調査地の位置と既往の調査	1

第 II 章 調査の成果

第 1 節 調査区配置と基本層序	2
第 2 節 本発掘調査の成果	2

第 III 章 総括

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

兵庫県姫路市忍町67において、株式会社ANGELOによるその他建物（宿泊施設）の建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号020169、近世、集落跡）に該当しているため、文化財保護法第93条第1項に基づき平成30年（2018年）8月13日に姫路市教育長宛に届出がなされた。これを受けて、姫路市教育委員会 生涯学習部 文化財課が工事内容の精査、事業者との調整を行い、工事に先立ち事業地内の埋蔵文化財の保存状況等を確認するために確認調査を実施することになった。平成31年（2019年）4月16日に確認調査（遺跡調査番号20190025、姫路城跡第417次調査）を行い、外堀石垣等が良好に残っていることを確認した。これを受けて、5月28日に結果報告と本発掘調査を要する旨の指示・勧告（31教文発第2号）を行った。その後、事業者と石垣の現地保存に関して繰り返し協議を行ったが、最終的に現地保存は不可能との結論に達したため、工事で埋蔵文化財が破壊される範囲を対象に本発掘調査を実施することになった。

文化財課で調査条件等の調整を行った後、姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターを主管課として、7月11日付で株式会社ANGELOと姫路市との間で「姫路市忍町67に存する埋蔵文化財（姫路城城下町跡）発掘調査委託契約」を締結し、本発掘調査（遺跡調査番号20190189、姫路城跡第424次調査）に着手した。調査は事業者から提供を受けた機械、作業員等により実施し、調査期間は土留工事による中断期間を含め令和元年7月25日から10月16日であった。また、解体した石垣の築石等の内、今後の姫路城跡石垣修理での活用が見込まれるものは、別途保管した。調査成果に関しては、令和元年10月1日から令和2年（2020年）1月8日にかけて開催した姫路市埋蔵文化財センターでのパネル展や11月17日に開催した発掘調査成果報告会で公開した。

現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理作業を開始し、令和2年3月31日の本書刊行をもって、事業を終了した。

第2節 調査地の位置と既往の調査

調査地である忍町67は、昭和30年（1955年）から平成27年（2015年）まで営業されていた娯楽施設、姫路大劇会館の跡地である。北は姫路市道幹第8号線（十二所前線）に面し、南東200mに山陽電鉄姫路駅、同300mにJR姫路駅がある。繁華街にも近く、その立地の良さから近辺では宿泊施設の建設が相次いでいる。

調査地は、姫路城天守から南西約1.2km、外曲輪南西端付近に位置する。姫路城は、池田輝政により慶長6年（1601年）から9年の歳月をかけて築かれた平山城である。天守が築かれた姫山を中心に内堀、中堀、外堀の三重の堀がめぐらされ、武家屋敷や町屋などを囲い込む惣構の縄張が採られた巨大な城郭である。絵図によると調査地は南から外堀、土塁、武家屋敷地、街路に該当していることがわかる（図1）。

調査地周辺ではこれまでにも開発工事等に伴う発掘調査を実施しており、外堀の調査としては、姫路城跡271・276次調査（南町22-1・14-1他、遺跡調査番号20110221・20110334・20120077・20120231）、第290次調査（忍町83・75、遺跡調査番号20120216）がある。前者の調査では外堀埋土を確認し、現地表下3.8m（標高約8.0m）で堀底に至った。さらに堀の立ち上がりを確認したことで、その位置を概ね特定できた。後者では石垣が残存していなかったものの外堀埋土の広がりや遺構の分布状況による土塁位置の推定などから、酒井氏時代に描かれた『姫路侍屋敷図』と地形図を合成した城郭図（図1）と比べて、実際の外堀位

置が5m北にずれる可能性が指摘された（姫路市教育委員会2013）。その他、十二所前線で実施した第328次調査（遺跡調査番号20140290）の街路や、今回の事業地内、2区西隣で実施した第366次調査（遺跡調査番号20160359）の外堀石垣に関しても同様の状況が認められた（姫路市教育委員会2016a・2017）。これらについて、今回の調査成果と合わせて図11に整理している。

外堀に関する史料としては、享保15年（1730年）頃のものとみられる『姫路城總堀管尺大間數図』がある（姫路市立城郭研究室2014）。調査地付近の堀には「堀幅拾間、水深サ四尺五寸」との記述がある。また、城下町絵図によって石垣の鍵形屈曲の表現の有無が分かっていたが、昭和11年（1936年）発行の『姫路市土地寶典』では、調査地は大きな区画として表現されており、南には鍵状の石垣の屈曲を反映したとみられる突出が描かれ、外堀跡には水路の表現がある。後述の通り調査地では石垣修理が行われていることが明らかになったが、これに関する史料は今のところ知られていない。

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査区配置と基本層序

調査区は2か所に分かれており、北側の調査区を1区、南側を2区と呼称する（図2）。現地表は、標高11.6mである。1区南壁を例にとると、現代の盛土約60cm、土壌に伴うとみられる近世の盛土約20cm、城下町築造以前の耕土5cm、自然堆積層5cmを経て、標高約10.75mで地山に至る（図3）。なお、1区では既存建物基礎による擾乱が特に顕著で、深いところでは現地表下3m近くまで達していた。全く擾乱を受けていないのは、南壁際の一部（図3の土壌盛土残存範囲）のみである。

2区では約1mの盛土、厚さ約3mの外堀埋土を経て、標高約7.6mで堀底の地山に至る（図7）。

第2節 本発掘調査の成果

1. 1区の遺構・遺物

近世の井戸2基、中世の溝1条及び土坑1基を確認した（図3・4）。

SE1 直径2.3mの円形掘方を持ち、石組は上部1mが失われていた。使用石材は円礫を主体とし、部分的に角礫と比較的大型の凝灰岩を用いる。石組の平面形は隅丸方形を呈し、一辺1m、深さ1.1mを測り、底には直径70cm、深さ50cmの桶の痕跡があった。桶は腐朽が著しく、わずかに土に付着した木目が確認できたのみである。

出土遺物は少なく、石組を検出するまでの土層から出土した。染付磁器鉢（図4-1）、施釉陶器皿（2）、関西系焼締陶器擂鉢（3）がある。1は大橋IV期（大橋1989）、3は白神I型式（白神1992）に当たり、概ね18世紀中葉から後葉の年代を示す。

SE2 直径1.8mの円形掘方を持ち、石組は上部1m分が失われていた。使用石材は円礫を主体とし、わずかに角礫と比較的大型の凝灰岩を用いる。石組の平面形は直径70cmの円形で、深さ1.4mを測り、底には直径40cm、深さ30cmの桶の痕跡があった。桶は腐朽が著しく、わずかに土に付着した木目が確認できたのみである。遺物は出土していない。

SD1 検出部の延長3.8m、幅60cm、深さ10cmを測る。主軸はW-21°-Nで、飾磨郡条里と合致する。埋土には調査区南壁で見られた城下町築造以前の耕土とその下層の自然堆積層がブロック状に含まれており、耕作に伴うものと考えられる。遺物は出土していない。

SK1 大部分が擾乱されており、原形は不明である。埋土は深さ20cm分が残存しており、灰白色を呈している。出土遺物は1点のみである。図4-4は土師器托皿の底部で、12世紀前半の年代が与えられている（姫路市教育委員会2018）。

2. 2区の遺構・遺物

姫路城外堀に該当し、堀の北面石垣を確認した。石垣は健形に屈曲しており、確認した総延長は約20mである（図5）。以下では図6のとおり屈曲部以西をA面、屈曲部の南北石垣をB面、屈曲部以東をC面と呼称する。

残存状況 石垣の残存状況は良好で、残存高は最大3mを測る。石垣天端は最高所で標高10.8m、現地表下70cmで確認しており、1区の基本層序と照合するとほぼ本来の高さを保っていると推測される。断面形状はB面半ばが若干孕み出すものの、概ね構築当時の姿を残している。石垣の傾斜角度はA面で68°、B面で65°、C面上半で59°である（図7）。

修理状況 B面南端からC面にかけて、石垣の崩壊とそれを修理した痕跡がみられた。C面では、石垣天端（標高10.6m）から標高8.8mまでの高さ1.8m分の石垣（以下、「上部石垣」と呼称）が認められ、それ以下の高さ1.2m分は築石及び裏込めの円礎等が崩落した状態であった（図7・8）。また、上部石垣の最下段の築石は前面に30cm程飛び出している点に特徴があり（写真図版6 ⑪）、これには幅約40cm、控長約80cmの扁平な石材が使用されていた（写真図版6 ⑫）。その下部、築石及び裏込めの崩落部に関しては、これらを除去したところ上部石垣と組み合わない石垣基底石が確認された。そのうち東から3点目の基底石は前転倒立した状態でみつかった（図6 C-2面）。

以上の状況から、石垣修理の手順を次のように復元した。崩壊した築石等のうち大部分を残置したまま整地し、扁平で控長の長い石材を基底部に据える。その上に石垣を構築するが、その際基底に据えた石より約30cm後退した位置から石垣を積み上げていく。これは、崩落土上に構築する石垣の安定性を高める措置であったと推測される。上部石垣の傾斜角度が他面に比べて緩やかであること、同様の理由によるものであろう。また、図7のC-C'断面にみえるように、石垣の安定性を高めるために上部石垣裏の地山を掘削して傾斜を緩やかにし、裏込めを厚くしている可能性がある。

また、A面も石垣の積み直しが行われた可能性を指摘しておきたい。その範囲は図8に青線で示した。その根拠は、青線の上下で石積みの様相が異なり、上部では乱れが顕著であることに加え、この部分の断面（図7 A-A'断面）では石積みの様相に対応して裏込土にも色調差が認められたためである。ただし、裏込土については色調差がわずかであったことに加え、外堀埋土の影響があったため確実とはいえない。また、外堀埋土の掘削時に石垣から脱落したとみられる大型の石材が散在していたがその数は多くなく、石垣の積み直しが行われたとすれば築石は再利用されたものと考えられる。

使用石材と矢穴 使用される石材は大きても50cm程で、一部に花崗岩系の石材が使用されるが、主体は凝灰岩である（図8）。内曲輪のものと比較すると小振りで、割れが目立つなど凝灰岩の質等も内曲輪のものとは異なっている。

矢穴は築石16点で確認できた。最大幅が10cmを超えるものは1点のみで、7cm程のものが大半を占めている（表1）。内曲輪では通常10cm以上であることを考えるとその差は明確である。

外堀底 外堀底は現地表下約4mの標高7.7～7.8mで、わずかな凹凸はあるものの全体としては平坦であった。

外堀埋土 石垣検出面以下の大堀内には近世から近代にかけての陶磁器等を包含する黒色粘土が厚く堆積していた。また、第1章第2節で紹介した『姫路市土地寶典』の記載のとおり、外堀埋没後に設けられた水

路とみられる落ち込み（図7 C-C'断面：1～5層）も部分的に確認されている。

出土遺物 外堀埋土からは近世から近代にかけての陶磁器等が出土した。その比率は、近代のものが約7割を占めている。主な陶磁器類は写真図版7に掲載し、2点のみ実測図を掲載した。

図10-5は丁銀形土製品で、姫路城跡出土のものでは5例目である。文政丁銀を模しており、穿孔のある上半を欠失し、残存長6cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmを測る。表面は型押し成形、裏面は指オサエが顕著で、側面には型押しに伴うバリが残されている。表面は下端に丸い窪みに「文」、その上は本来分割線により3段6分割するが、本例では中・下段2段分が残存する。中段右には七福神の恵比寿、左には大黒天を描き、下段には上下反転した「寶」を刻む。欠失した上段は類例から正位の「寶」が、また上端は下端と同様に左右反転した「文」が刻まれていると推測される。鍍銀痕跡等は確認できない。本例と同型によるものとみられるのは中曲輪で実施した国立姫路病院更新整備に伴う発掘調査で2点確認されている（姫路市教育委員会2001・2003）。1点は攪乱土中、もう1点は19世紀代の一括遺物が出土した土坑からの出土である。その他、第328・334次調査で1点ずつ出土しているが、文字の形態等に違いがみられ、別の型により製作されたものと考えられる（姫路市教育委員会2016a・b）。

6は東山焼磁器八角花生である。上半を欠失する。高台内にある松葉菱に「永」の銘から、明治9年から15年頃に姫路で作陶した永世社の製品であることがわかる。疊付は釉剥ぎで、内外面には貫入がみられる。

第三章 総括

今回の調査では、外堀から土塁、武家屋敷地にかけての調査を行った。1区は既存建物基礎による擾乱が顕著で、遺構の残りは悪く、近世の遺構としては井戸を2基確認したに過ぎない。また、調査区南壁際では土塁に伴うとみられる近世の盛土層がみられた。2区で検出した石垣A面の天端からSE1・SE2までの距離が約9mであることから、土塁の幅はそれ以下と想定できる。なお、近隣で実施した第290次調査では土塁の幅を5.8m以下と推測しているが（姫路市教育委員会2013）、先述の石垣天端から土塁盛土残存範囲の北端までの計測値は約6mと非常に近しい数値を示す。

2区で検出した石垣は良好な保存状態を保っていた。また、鍵状の屈曲部を確認したことによって、周辺の調査成果と合わせて外堀の位置を確定することができた（図11）。

また、注目すべきはB・C面の石垣崩落状況とその後の修理手法である。石垣崩落部を撤去することなく、その上に石垣を積み直すような手法は、少なくとも姫路城ではこれまで確認されていない。また、東隣で実施した第366次調査の成果を合わせると、C面にみられた石垣の崩落は石垣屈曲角部から幅8m以上にわたって発生していることが判明した（図9）。第366次調査区では、今回確認した修理による石垣積み直しも明瞭で、その下部の石垣は崩落はしていないものの形状は大きく損なわれ、築石は前方に大きくずれ動いていたことが確認されている（姫路市教育委員会2017）。

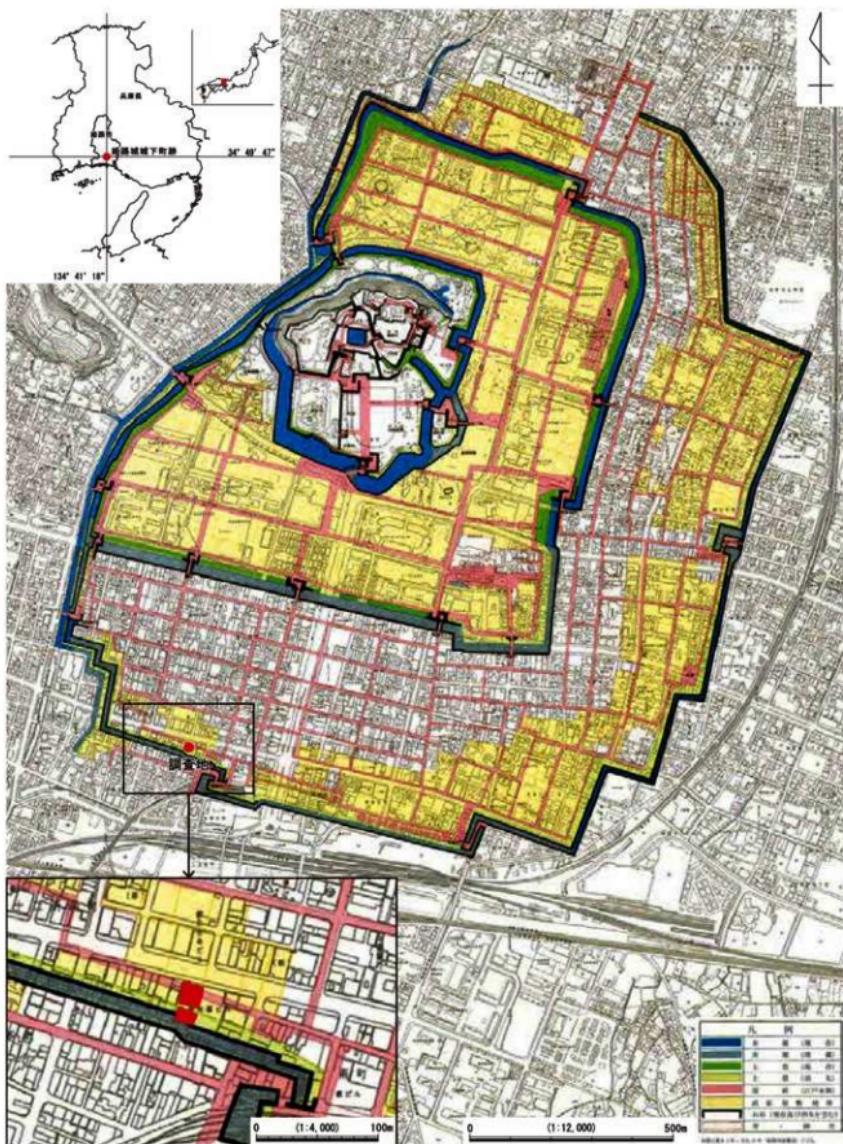
石垣崩落部を残置したまま、その上に石垣を積み直すという修理手法がとられた理由に関して、残された史料や調査結果から検討を加えたい。まず、なぜ石垣の積み直しが外堀底から1.2m高い位置で行われたのか。これを考える上で有用なのが第1章第2節で紹介した『姫路城總堀管尺大間数図』で、先述のとおりこれには調査地付近の外堀に関して「水深サ四尺五寸」という記述がある。ここから導かれる水面の高さはC面上部石垣の最下段石材の上面とほぼ合致しており、外堀の水位と密接に関連していることが推測される。崩落部を残置する手法を省力化の一環とみるのはほぼ間違いないが、その要因はどこにあるのだろう

か。ヒントとなるのが調査地から東方約850mで実施した第334次調査である。その際確認した外堀底の標高は9.5m、今回確認した外堀底の方が約1.7m低いことが判明している（姫路市教育委員会2016b）。崩落部の撤去を行うには当然外堀の水位を下げる必要があるが、この外堀底の高低差が原因で排水もしくは止水措置が困難だった可能性がある。ただし、これは外堀の導水・排水等がどのように行われていたかという問題と密接に関わるため現時点では断定はできず、今後の調査の進展を踏まえて検討されることが望まれる。

【引用・参考文献】

- 大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー 55) ニュー・サイエンス社
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会10周年記念)
白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第19号 東洋陶磁学会
瀬戸市 1998『瀬戸市史 陶磁史篇六』
帝國市町村地圖刊行會 1936『姫路市土地寶典』
姫路市教育委員会 2001『特別史跡姫路城跡I』(国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告①)
姫路市教育委員会 2003『特別史跡姫路城跡II』(国立姫路病院更新整備工事に伴う発掘調査報告②)
姫路市教育委員会 2013『姫路城城下町跡—姫路城跡第290次発掘調査告書一』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第8集)
姫路市教育委員会 2016a『姫路城城下町跡—姫路城跡第328次発掘調査告書一』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第32集)
姫路市教育委員会 2016b『姫路城城下町跡—姫路城跡第334次発掘調査報告書一』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第35集)
姫路市教育委員会 2017『姫路城城下町跡—姫路城跡第366次発掘調査告書一』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第54集)
姫路市教育委員会 2018『村東遺跡』(姫路市埋蔵文化財センター調査報告第56集)
山本和人 2004「姫路のやきもの 東山焼試論」『姫路美術工芸館紀要5』姫路市書写の里・美術工芸館
姫路市立城郭研究室 2014『姫路城絵図集』

図版1



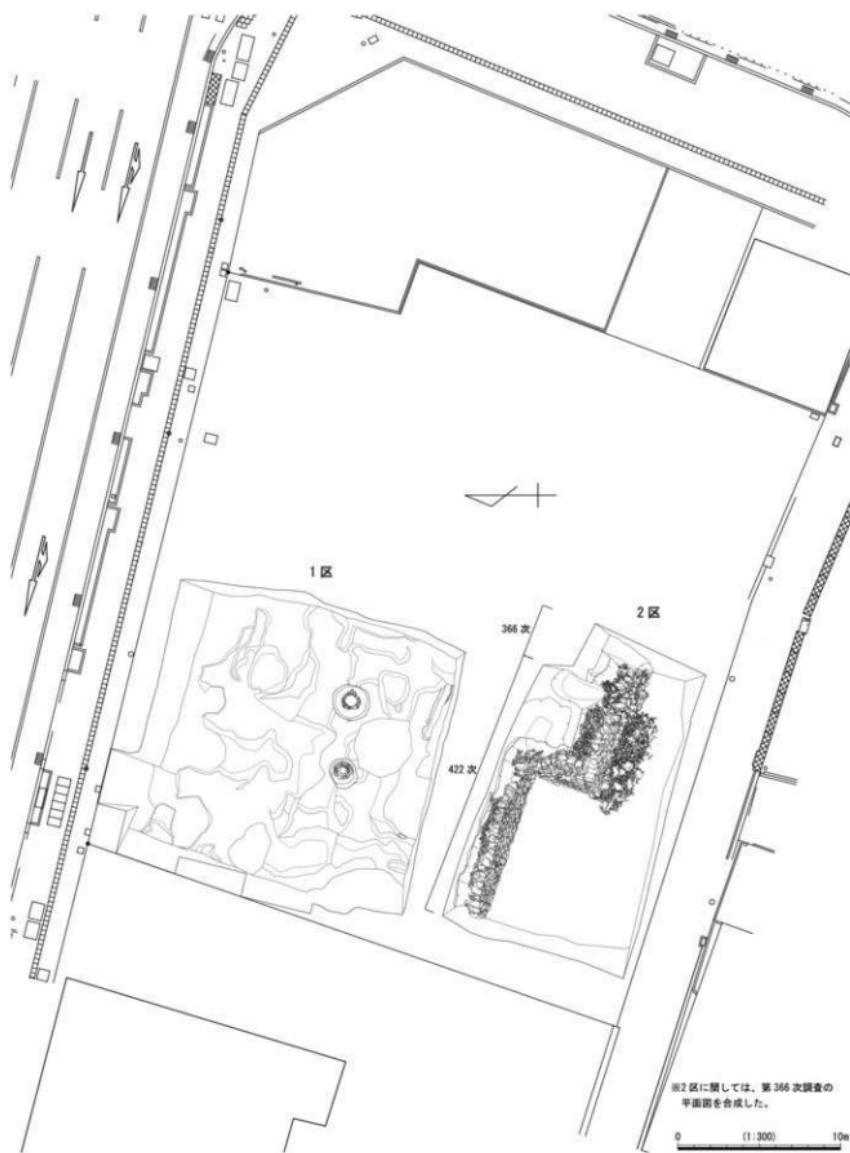


図2 調査区配置図

図版3

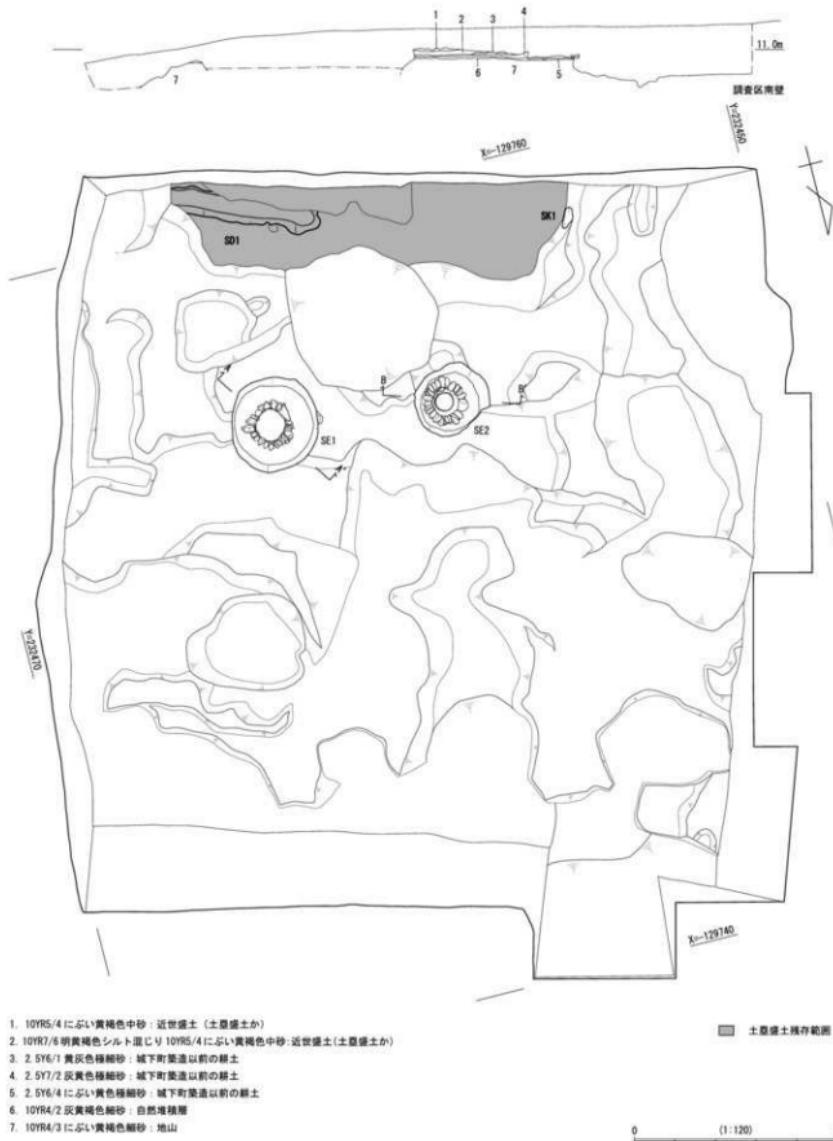
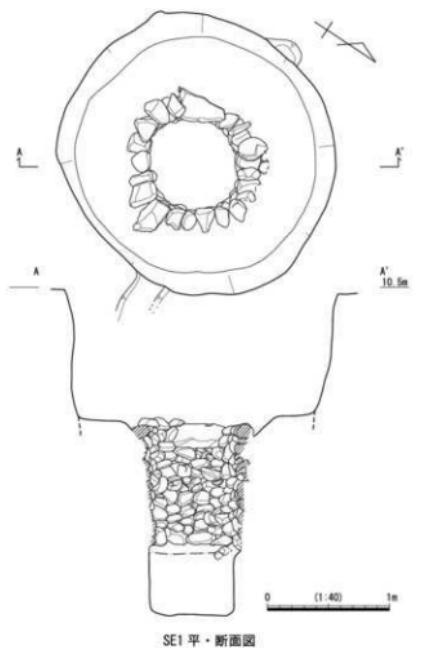
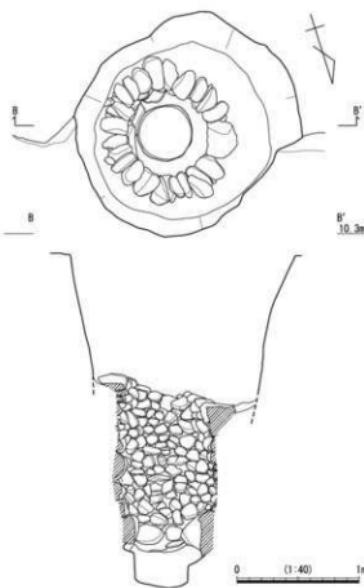


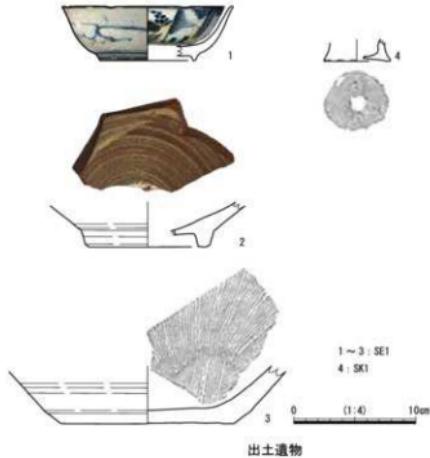
図3 1区 平・断面図



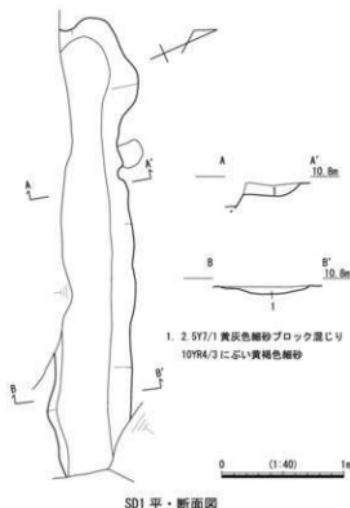
SE1 平・断面図



SE2 平・断面図



出土遺物



SD1 平・断面図

図4 1区 個別遺構

図版 5

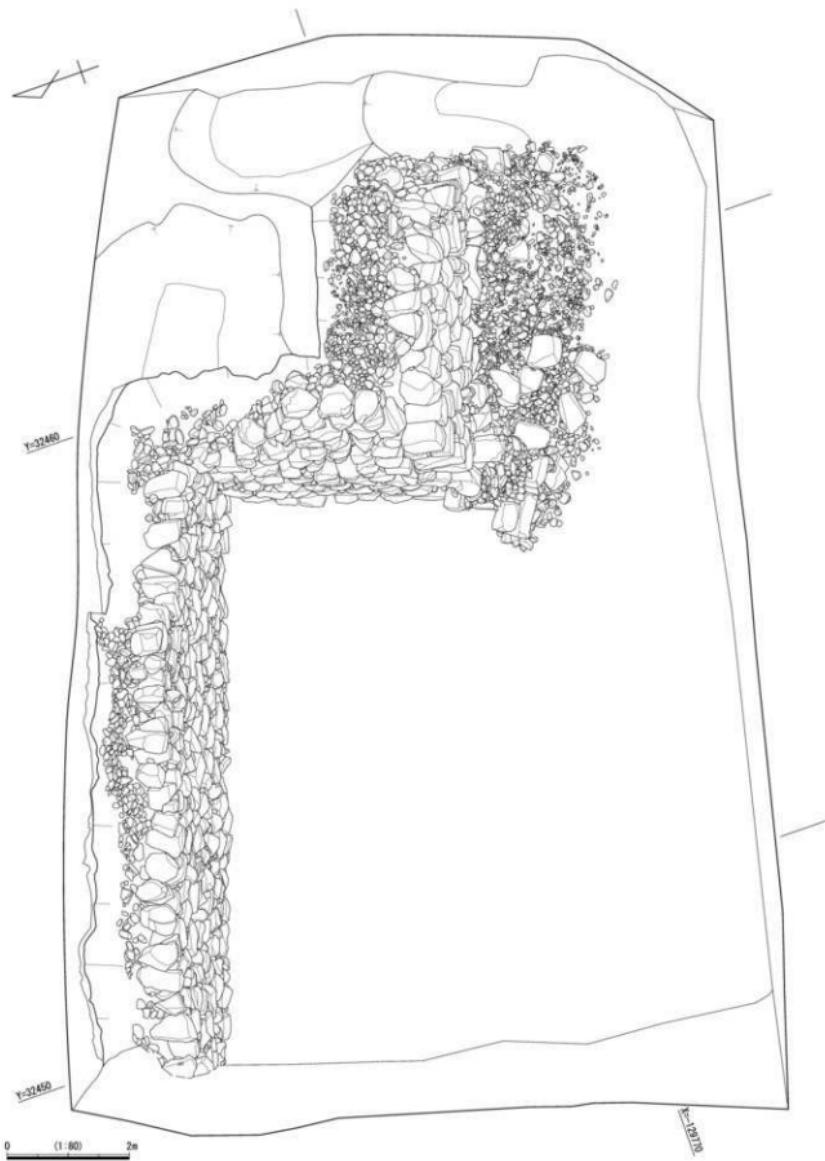


図5 2区 平面図

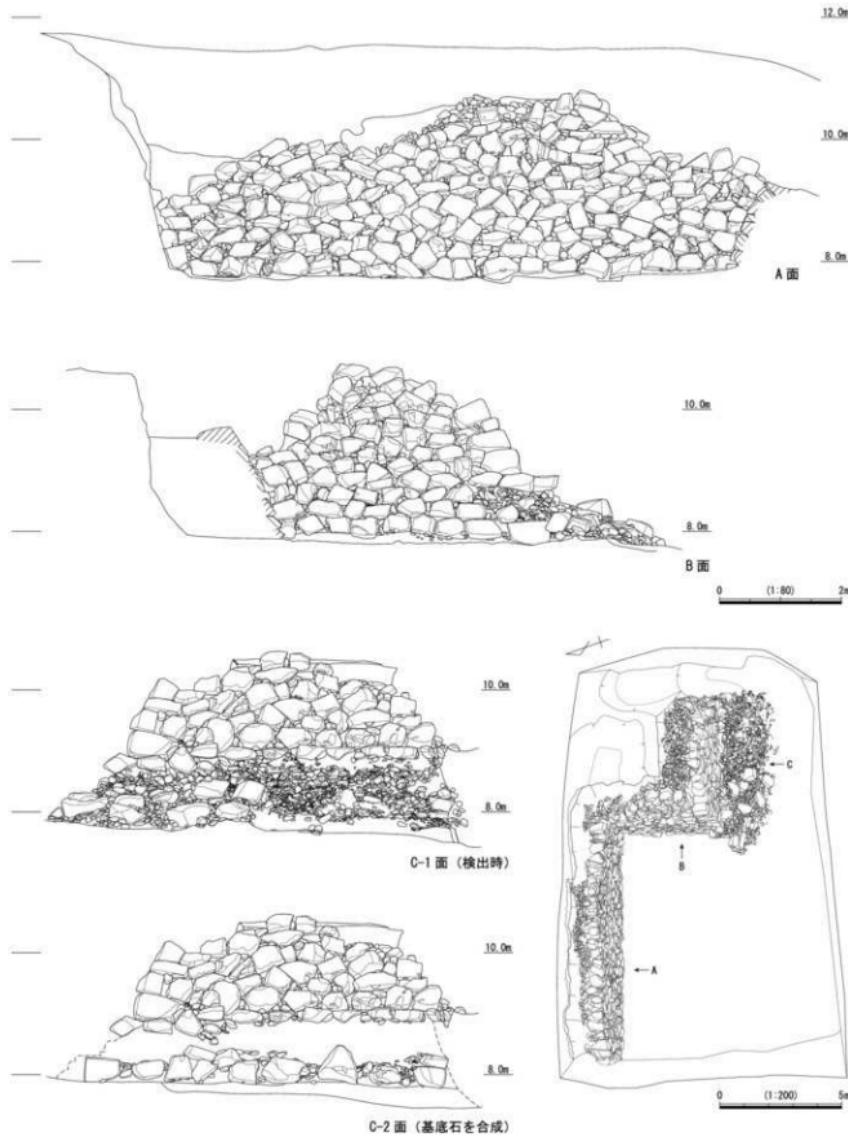


図6 石垣立面図

図版 7

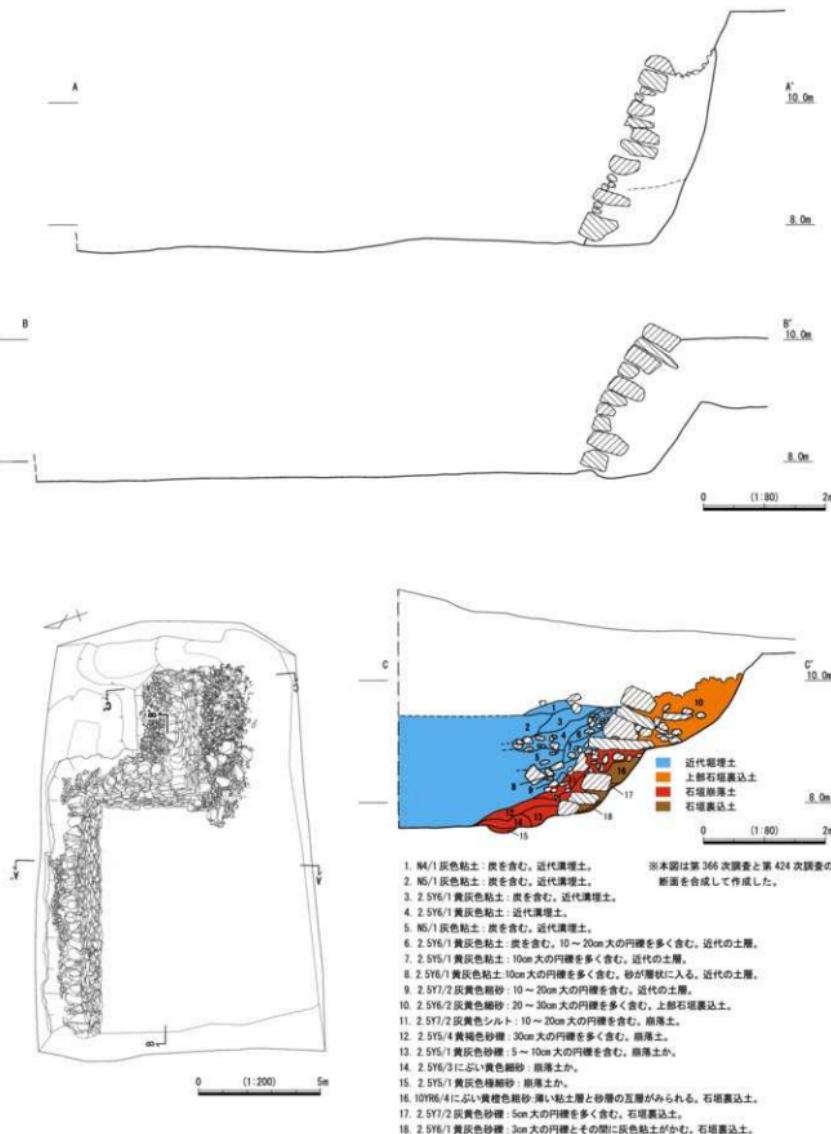


図7 石垣断面図

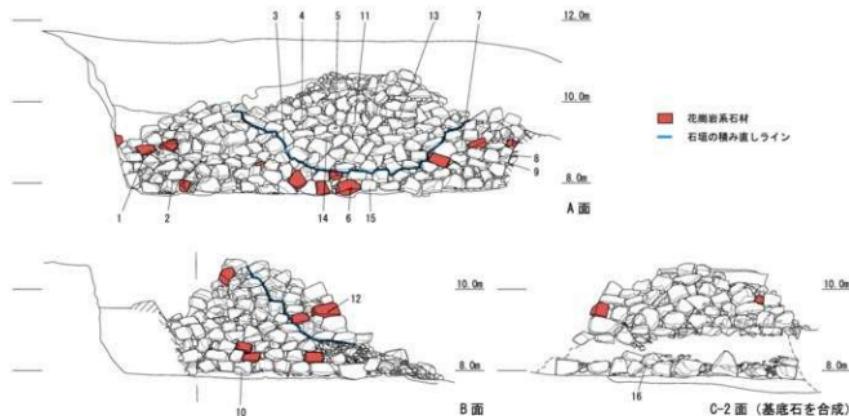


表1 矢穴計測表

No.	計測値				
	a	b	c	d	e
1	8	2.5 ~	5		7
	6.5	2.5 ~			8
2	7	3 ~	5		7
3	7	4 ~	5		6
4	7	4	5	2	7
5	9.5	5	8	1	5
6	9	3 ~	5		5
7	9 ~	2.5 ~			8 ~
8	7 ~	2 ~			
9	8				4
10	8	3 ~	6		8
11	7	2 ~	5.5		4
12	7	3 ~	5		6
13	7	2 ~	4.5		4
14	10.5	3 ~	8		9
15	7		5		7
16	9	4 ~			8

(単位 : cm)

凡例

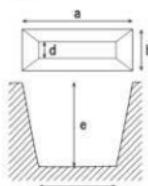


図8 石垣使用石材と矢穴

図版9



図9 石垣C面と第366次調査石垣オルソ画像合成図



図10 外堀出土遺物



図11 外堀推定図



① 1区（東から）



② 1区 南壁（北から）



③ 1区 SE1（北から）



⑤ 1区 SK1（西から）



④ 1区 SE1（北から）

写真図版 2



⑥ 2区 全景 (南西から)



⑦ 2区 全景（南西から）



⑧ 2区 全景（西から）



⑨ 2区 全景（東から）

写真図版 4



⑩ 石垣A面（南から）



⑪ 石垣A面裏込（西から）



⑫ 石垣A・B面入隅部（南西から）



⑬ 石垣B面（西から）



⑭ 石垣B面裏込（北から）



⑯ 石垣B・C面崩落状況（西から）



⑰ 石垣C面崩落状況（南から）

写真図版 6



⑪ 石垣C面（東から）



⑫ 石垣C面崩落前基底石と上部石垣（東から）



⑬ 石垣C面上部石垣最下段の壊石（南東から）



⑭ 2区とその周辺（西から）



外堀出土近世磁器



外堀出土近代磁器



外堀出土陶器

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第424次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第103集							
編著者名	黒田 祐介							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1							
発行年月日	令和2年（2020年）3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡	忍町67	28201	020169	34°49'47"	134°41'18"	2019.7.25～2019.10.16	456 m ²	その他建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	近世 中世	外堀・井戸 溝・土坑				陶磁器・瓦 土師器	
要約	<p>調査地は姫路城外曲輪南西部に位置し、外堀・土塁・武家屋敷地に該当している。1区においては、近世の井戸及び土塁に伴うとみられる盛土、中世の溝・土坑を確認した。一方、外堀に該当する2区においては、良好な保存状態の外堀北面の石垣を確認した。石垣は、鍵形に屈曲しており、近隣での既往調査の成果と合わせて調査地周辺の外堀の位置を確定することができた。また、検出した石垣は修理が行われているが、その手法は崩落した石垣を残置したままその上に石垣を再構築するというものであった。これまでの姫路城跡の調査では確認されていない事例である。</p>							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第103集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第424次発掘調査報告書—

令和2年（2020年）3月31日 発行

編集 姫路市埋蔵文化財センター
 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
 TEL(079)252-3950

発行 姫路市教育委員会
 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
 〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2